

28K-pm06

実務実習事前学習における学習者の態度評価の客観性と自己評価の検討

○福井 楓¹, 土肥 弘久¹, 萩原 幸彦¹, 堀口 よし江¹, 増田 豊¹, 北島 潤一¹, 高野 昭人¹, 千葉 良子¹, 濱島 肇¹, 濱本 知之¹, 廣原 正宜¹, 福森 隆次¹, 小野寺 敏¹, 渡部 一宏¹, 山本 健¹, 山本 美智子¹ (昭和薬大)

【目的】実務実習事前学習や薬局・病院実務実習における学習者の態度を評価することは重要である。しかし、学習者の態度を高い客観性をもって評価することは非常に困難である。学習者の態度に関して、学習者による自己評価は学習者が次に何をなすべきかを気付かせるために意義がある方法であるとの報告がある。そこで我々は、客観性が高くかつ学習者の学習効果が向上するような評価方法を策定することを目的とし、実務実習事前学習での教員による評価と学習者の自己評価の相関性について検証した。

【方法】2015年度、昭和薬科大学4年生191名を対象とし、実務実習事前学習の病棟における初回面談（以下、面談）と服薬指導（以下、指導）の内容を評価した。教員を模擬患者、学生を薬剤師役とし、1対1のロールプレイ形式の実習を実施した。評価方法は、面談18項目、指導16項目からなる評価シートを作成し、設問項目に対してプリコード形式で評価・点数化した。教員による評価および学生の自己評価結果を統計学的手法にて分析を行った。

【結果・考察】教員による評価と学生の自己評価について、それぞれの合計点における相関係数を求めたところ、面談、指導共に有意な相関が得られた（面談： $p < 0.01$ 、指導： $p < 0.01$ ）。一方、t検定を用いた分析では、両者間で有意な差が認められた。このことから両者間での評価傾向は同じであるが、点数において差があることが分かった。また、教員による評価結果をCustomer Satisfaction (CS)分析を応用し、設問項目の重要度分布を作成した結果、各教員が重視している項目が明らかとなった。しかし、教員間で重視している項目が異なることも分かったため、客観的な評価を行うためには重要因子の統一か平坦化が求められる。